

A Study on Approach of Measurement Survey for Reuse of Townhouse : Case Study of Activities in Old Dry-goods Shop in Tono-City, Iwate

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 泰彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1050

町家の活用に向けた実測調査の手法に関する考察

—岩手県遠野市の旧呉服店での活動を事例に—

A Study on Approach of Measurement Survey for Reuse of Townhouse
- Case Study of Activities in Old Dry-goods Shop in Tono-City, Iwate -

伊藤泰彦*

Yasuhiko Ito

1 はじめに

岩手県遠野市の中心市街地は、鍋倉城下の旧城下町である。町なかを釜石街道が通り、その街道沿いを中心に町家が並んでいた。中でも一日市町は、かつて六日町同様に市日が設けられた町である。いまでも、当時の都市的骨格が残っており、一日市町には店舗が並んでいる。その一角に、旧呉服店・三田屋が建つ。町なかの比較的広い敷地に、主屋のほか、複数の蔵やお針子小屋、そして家畜小屋を有していた。主屋は、明治33年に建設された。写真1は、大正期のものと聞く。写真2は、2012年に撮影したものである。改修を繰り返し、外観も当時とかなり違うが、遠野の町家の特徴を色濃く残している。呉服店の廃業後、解体・建て替えの話がある中、2012年から町家の保存・活用に向けた活動がスタートした。この活動は、建築家・安宅研太郎らを中心に、遠野一帯の環境と生業の再生を目指すプロジェクト（「遠野オフキャンパス」と呼ぶ）の一環であり、またそのキックオフ的な役割を担う活動である。遠野オフキャンパスの活動が7年目を迎えるいま、三田屋を中心とした城下町と町家のほか、馬と暮らし、町なかの生業、重要文化財・千葉家と集落の景観など、幅広いテーマに取り組んでいる。

筆者は、初年度の2012年の三田屋での活動を切っ掛けに、遠野オフキャンパスに関わっている。三田屋では、調査・改修・活用そして周辺のフィールドワークなどを行ってきたが、継続して行ってきたことに建築の実測調査がある。本稿は、三田屋での実測調査の経過を振り返り、古



写真1. 大正期の三田屋外観



写真2. 実測調査開始時の三田屋外観

*工学部教授（建築デザイン学科）

民家の利活用に向けた活動における実測調査の手法を論じることを目的とする。

2 実測調査の経過報告

三田屋での活動は、その都度、長期的なことといま必要なことを見計らいながらプログラムが組まれてきた。単に建築の保存を目的とするのではなく、地域資産としての価値の発見と今後の活用に繋げることがテーマである。計画・設計・改修・活用の段階を区切るのではなく、それらを同時並行させて進めている点に特徴がある。本格的な改修の前に活用の実験を都度重ねて、今後の計画に活かそうとしている。そして、その軸に各種の調査がある。現地で活動する日数が毎年限られるが、そのことを制約ではなく逆手にとろうとしている。本章では、建築の実測調査を行うことの意義の整理に向けて、どのような段階を経て調査を行ってきたのか述べる。

2.1 活動初年度：計画のための第1歩

2012年の夏、地域の高校生17名、建築を学ぶ大学生12名らと三田屋の実測調査を行った。高校生は2日間、大学生は4日間の調査である。大学生を中心に平面図・断面図などの図面を起こすとともに、大学生と高校生が複数のチームに分かれて、いくつかの部屋の展開図を作成した(写真3)。それらの野帳を通りに面した三田屋のショーウィンドウに展示して、町を行き交う人に向けて見せた(写真4)。また、この実測調査と同時に、かつての住人や近隣住民に聞き取り調査を行っている。聞き取り調査は、地域や建築に関するメディアの編集者・尾内志帆と松井真平がファシリテーターとなり高校生が参加し、その成果も展示した。

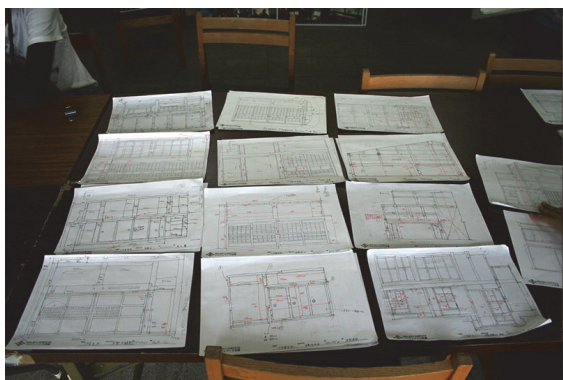


写真3. 大学生高校生が作成した野帳



写真4. 活動成果の展示風景

なお、筆者はこの初年度企画の立案には関わっておらず、安宅らが具体的なプログラムを立てた。安宅は、事前に高校を訪れ、調査に参加する高校生に実測のレクチャーをしている。筆者は現地調査の本番に同行し、実測の指導に関わったという立場である。この高校生らを巻き込んだ目的を、次のように理解している。

保存や活用に向けた計画を立てる上で必要な、現況の図面がない。その図面を専門家が人知れずまとめてしまうと、成果物は残るものの活動の広がりや生まれない。そのために、地域の人と専門家が協働する作業の中で、三田屋そして遠野の町家の価値を共有することを目論んだ。また、遠野市内には高校卒業後の進学先がない。つまりは高校生の多くは、卒業後に市外に出る。この活動で遠野らしさに触れると同時に、大学生や専門家との関わりを高校生のキャリア教育の場と

する。近い将来大学生スタッフとして参加したり、修学後に地域に戻る切っ掛けになることも期待の一つとしている。

地域住民・商店会・高校教員・自治体職員も、一緒になって活動した。調査する側される側、そして活動をサポートする側、それぞれの立場に立ってである。わずか4日間の活動であったが、このときの概要を表1に示す。実測については、特別ゲストとして参加した建築家・元倉眞琴の「高校生の実測、使えるね」という声掛けの言葉が印象深い。高校生の生き生きとした様子、成果のクオリティ、地域の人が彼らを通じて活動自体をあたたく見守る雰囲気の内づれにも向けた言葉だと理解した。

表1. 遠野オフキャンパス 2012 秋・開催概要

日程	9/21 (金)	午前 午後 夜	遠野駅集合、町なか散策、ガイドンス・三田屋見学、内部片付け 実測準備 (チーム分け・手準備確認)、実測作業 ミーティング、成果の整理と翌日の準備
	9/22 (土)	午前 午後 夜	高校生参加 (ガイドンス・チーム分け)、実測作業 実測作業 ミーティング、成果の整理と翌日の準備
	9/23 (日)	午前 午後 夕刻 夜	実測作業、成果の整理 追加実測作業および成果の整理、成果発表 レクチャー (会場：三田屋店舗部分)、高校生解散 野帳の整理と展示準備
	9/24 (月)	午前 午後 夕刻	クイーンズメドウカントリーハウス、荒川高原牧場 見学 三田屋・野帳ほか展示作業 解散
	※宿泊先：クイーンズメドウカントリーハウス 高校生は事前に説明を受けて、9/22,23に参加 (両日とも、朝現地集合・夕刻現地解散)		
持ち物	メジャー、シャーペン、ボールペン、消しゴム、タオル、マスク、軍手、上履き、デジタルカメラ、虫よけ・虫刺されの薬		
参加者	特別講師：田瀬理夫 講師 (空間実測)：安宅研太郎、伊藤泰彦 講師 (メディア制作)：尾内志帆、松井真平 特別ゲスト：元倉眞琴 大学生：東京芸術大学 8 名、武蔵野大学 3 名、早稲田大学 1 名 (いずれも空間実測) 高校生：遠野高校 22 名 (空間実測 18 名、メディア制作 4 名) ※その他、運営に主催・共催関係者、聞き取り調査の被験者に元住人および地域住民が参加したほか、高校教員・商店会の協力があり、レクチャーへの参加は公開形式とした。		
主催 共催	主催：遠野市経営企画部 共催：株式会社ノース		

2.2 3年目からの実測調査①：軸組み調査

活動2年目の2013年には、市街地に残る三田屋以外の近隣の町家を訪ね、簡易の間取り図を起こしながら、遠野の町家の特徴を整理した。大学生と高校生をチームに分け、6軒の町家を調査している。筆者は、この近隣町家調査の企画に主に携わった。近隣の町家調査は、データで示すことはできないが、翌年以降の活動の中で地域住民の活動への理解に繋がった実感がある。またこの2013年には、構造家・丸橋森雄らの指導のもと、オモテの店舗1階軸組みの仮補強工事を行っている。今後、改修工事に向けた構造設計が必要となる。その設計に必要な、軸組図などの現況図面を起こすことを、2014年度の活動テーマの一つとした。

軸組みの実測は、ときに小屋裏に潜り込んでの作業となる。構造の部材が分からないと、どこに体重を預けてよいのかわからない。そこで、地元の大工の協力も得て、専門家と建築を学ぶ大学生が担当することとした。2014年の活動は、関西の大学を含む複数の大学からの学生が調査を行うこととなり、現地でCAD化を極力進めると同時に、活動の成果である野帳を三田屋に展示するなどの工夫を試みている(写真5, 写真6, 写真7)。



写真5.実測作業(2014年)

写真6. 翌日作業の準備(2014年)

写真7. 仮補強した店舗内での野帳展示(2014年)

改修と活用を同時に行う中で、実測調査の成果を焦らないことにした。実測調査に並行して、2015年に店舗部分1階と住居部分の一部、2016年に住居部分の別の一部、2017年に住居部分の更なる一部を改修している。次項で述べる痕跡調査と同時に進め、改修の都度、実測できる範囲を見極めた結果、2017年度の活動に至る4ヵ年の活動期間で、オモテの店舗とオクの住居の軸組みを統合させるに至った。4年間の実測調査のうち後半2ヵ年は、筆者と筆者が指導する大学院生を中心に成果をまとめた。本稿末尾に記す研究助成を得たことで、遠野オフキャンパスとしての限られた日程とは別に、現地に足を運べたことが大きい。半面、関わるメンバーが限られ、実測調査の活動の可視化が課題となる。遠野オフキャンパスの活動の中で成果報告をするとともに、原寸図の一部を現場に残し訪れる人へのアピールを試みている(写真8, 写真9)。



写真8. オモテとオクの繋ぎ部分の実測調査

写真9. 調査結果の原寸図(当該壁面に図面を描いている)

2.2 3年目からの実測調査②：痕跡調査

2014年の実測調査では、文化財保存の専門家・中村文美を招いた。加工や雨掛かりの有無などの痕跡について、現場で見るべきポイントと記録方法を、実践を通じて学ぶ機会となった。以後、移築保存された旧高善旅館（現とおの物語の館）などへ足を運び、三田屋で見た痕跡との比較を重ねることになる。2年目の近隣の町家調査の経験も役に立った。

三田屋では、前述の通りオモテの店舗、オクの座敷、通り土間のロウジと毎年少しずつ改修を重ねてきた。本格的な改修工事を行うまでの期間、活用の幅が広がるように、学生を中心とした手作りの仮の改修である。その度に、徐々に塞がれていた仕上げが剥がされる。そうして見えてきたかつての姿の痕跡を、時に図面として記録した（写真10、写真11）。



写真10. 座敷の改修作業（2017年）

写真11. 改修の傍らの実測調査（2017年）

3 実測調査の成果と課題

本章では、実測調査で明らかになってきたことをいくつか挙げる。今後も、改修や活用をしながら調査を続ける予定である。そのため、ここで述べる成果はあくまで断片的なものでしかない。成果のまとめは本稿とは別の機会にすることとし、本章ではいくつかの成果の項目に触れ、今後の課題を列挙する。

写真1と写真2を比較すると、昔に比べてオモテ（店舗部分）の1階の階高が高い。遠野の市街地の道路の舗装は、戦後に整備が進んだ。その結果、1階の床面は道路レベルより低くなっている。三田屋は昭和の改修で家揚げをしたことが、聞き取り調査から分かった。また、西側隣家の東面の外壁は、もともと三田屋の西面の外壁であったことが、現状から明らかとなった（写真12、写真13）。西側隣家はもともと三田屋の敷地で、三田屋に取りつくように建てられたのだと聞く。家揚げの際に、隣家が壊れないように三田屋の外壁を切り離したのだと判断できる。これらひとつ一つの裏付けが、実測調査の目的となる。断面詳細図、軸組図、痕跡図として記録に残している。かつては町家に塀はなく町家の間を通り抜けたり、家の中の通り土間（遠野では「ロウジ」と呼ぶ）を近隣の人が行き来していたという話を耳にした。街並みと暮らしの考察をさらに重ねたい。



写真 12. 三田屋北面西側外観



写真 13. 隣家の外壁部分（三田屋のもとの内壁が見える）

オモテ 2 階床組みの下端にほぞ穴などの痕跡がある。昭和の改修では階高を上げるとともに、1 階店舗の床や間仕切りの撤去がなされている。2 階は 2 間の座敷になっており、通りに面して腰窓部分に収納が張り出している。その部分の梁や柱の痕跡、妻面の痕跡、小屋組みを記録に残した。旧高善旅館をはじめ、近隣の事例を参照しながら復元図を起こしたい。

三田屋のオク（住居部分）のロウジは、一段低い屋根になっている。実測調査から、後遣りの工事で判断している（写真 14）。近隣の町家も、オクのロウジは簡易の屋根であることが多い。釜石街道沿いの六日町の町家などに、室内化したロウジを持たない町家も散見される。三田屋オクのロウジに、もともと屋根が架かっていたのかどうかの手掛かりを探し、遠野の町家のロウジについて一考察をしたいと考えている。

遠野の町家の店舗の奥には、炉・神棚・階段を配する常居（ジョウイ）がある。三田屋には、常居に続き中常居の 2 間が続く。オモテとオクを繋ぐ軸組みは、2017 年の実測調査で壁の一部に穴を開けて、確認することができた。いまは、オモテの 1,2 階は大きな階段で行き来できるが、かつては常居から行き来したはずである。その姿はまだ明らかにできていない。オモテの一部に売り座と呼ぶ床があったというが、その売り座も後遣りのようである。オモテとオクの関係性も、今後の課題である。

2017 年、庭に面した住居部分南西の一角を改修した。住居部分で唯一 2 階が設けてある。庭に面して、1 階は物置が取りつき、2 階は金属板で塞がれていたが、それらを撤去した。その改修の傍らで、実測を行った。庭との関係性も、三田屋での実測調査のテーマとしている。なお、ランドスケープデザイナーであり造園家の田瀬理夫、風景計画学の専門家・霜田亮祐を中心に、三田屋の

庭園調査を2016年から行っている（写真14）。考古学的手法を用いた、池や流れと呼ばれる水路の発掘調査が当面のテーマである。住居部分から眺める庭の風景について、考えていきたい。

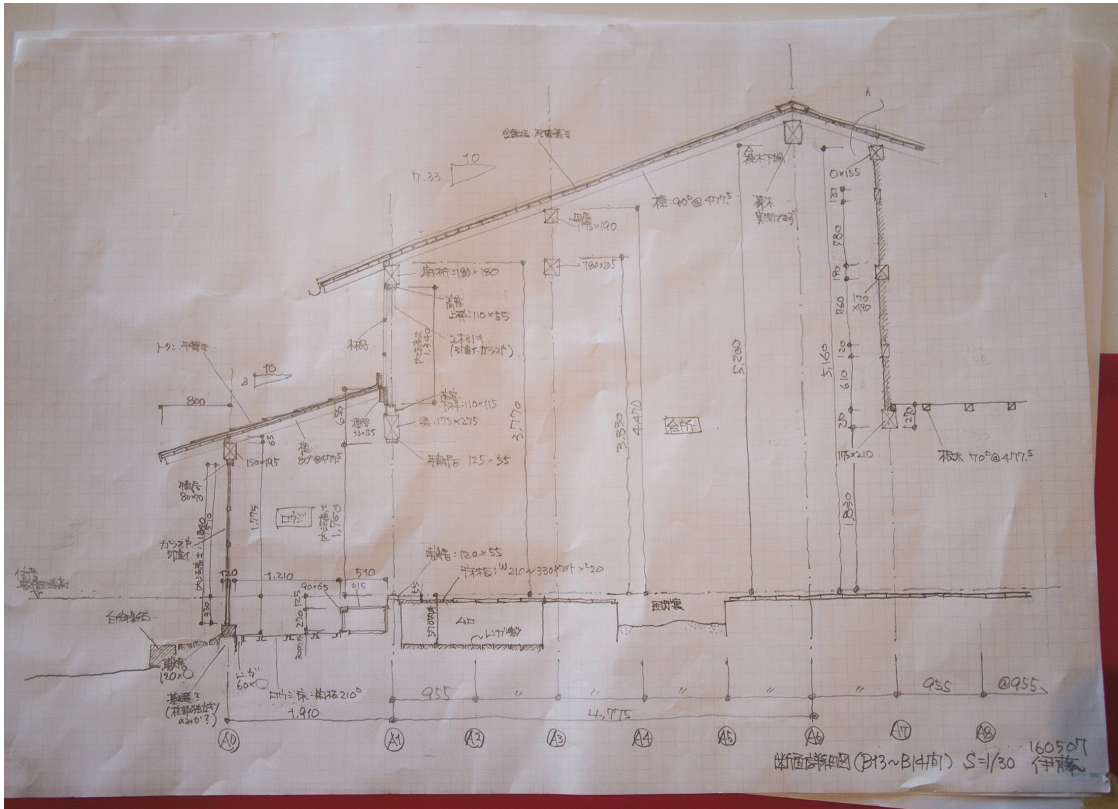


写真14. 住居部分の断面詳細（写真左手のロウジの屋根が一段低く、納まりから後遣りと判断できる）



写真15. 庭園調査風景（正面が住居の座敷）



写真16. 座敷2階（実測と並行した原状回復作業後の様子）

4 実測調査と並行した活用の実践

活用の実験を重ねながら調査を行うことについて、前章冒頭で述べた。本章では実際にどのように活用し、また活用されてきたのか、いくつか紹介する。

4.1 調査に関連したレクチャー

活動初年度から、店舗1階でのレクチャーを開催してきた(写真17, 写真18)。通りに面して、開かれた雰囲気を活かすようにしている。三田屋で調査を行う際の、半ば恒例の行事である。三田屋では、実測調査のほか各種の調査などを行っており、専門性が異なるメンバーが協働している。このレクチャーは、地域住民向けであると同時に、互いの成果の共有と次の目的を考える場でもある。



写真17. 調査初年度2012年のレクチャー風景



写真18. 2017年のレクチャー風景

4.2 店舗1階の活用と調査の成果の展示

店舗1階は、耐震のための仮補強工事にはじまり、展示壁を兼ねた壁の板張り、売り座の床張り、蔵に残っていた家具のリメイク、水回りの設置などを行ってきた(写真19, 写真20)。

一体的な土間空間と売り座を使って、一日市町の人は自治会・商店会の会合、祭りの準備などに利用している。いわば集会所である。調査に参加した高校生から、勉強をしに来ていると聞いた。町なかの自習室といえる。市立博物館の企画展の開催記念イベントで、地域の伝統芸能・御神楽が、売り座を舞台に開催された(写真21)。市内の他施設と連携したイベントスペースとしての活用の1例である。三田屋のある一日市通り沿いに、Commons Cafeができた。2016年4月から活動するNext Commons Lab 遠野の活動拠点である。同団体は、地域おこし協力隊を活用した起業家の受け皿であるが、そのメンバーらが企画するイベントにも活用されている。つまり、市外から遠野に根を下ろそうとする起業家の実験の場になりつつある。三田屋のショーウィンドウなど、一日市の女将さんの会で季節に合わせた設えの工夫もあり、また毎朝毎夕の戸の開け閉めもあり、旅人が立ち寄るスポットになっている。

その壁面に、調査の成果の展示を重ねてきた。地域の子どもをはじめとした住民個人、自治会・商店会、市内他施設、起業家、観光客などオープンエンドな人への調査の報告の場となっている。



写真 19. 店舗1階(売り座、展示壁、リメイク家具)

写真 20. 店舗1階に設けたキッチン



写真 21. 売り座の活用例（「町家で楽しむ女子神楽」2016年3月）

4.3 住居部分の改修と活用

オクの住居部分は、2014年、地域の女将さんの指導のもと昔ながらの方法で掃除をし、常居・中常居に手作りの床材を敷いた（写真 22, 写真 23, 写真 24, 写真 25）。本格的な改修までの間も活用でき、かつ空間の魅力を体感できることを意図しており、新聞紙やダンボールを床材に用いている。その一角を床の間にして、参加大学生の書を飾った。「建築書道」と銘打ち、建築を創作

文字で表現する活動に取り組む筆者研究室の学生作品である。この床の間は、その後商店会の女将さんの会で、季節ごとに花が飾られるようになった(写真 26)。翌年、店舗同様に蔵に残された材料を用いて、リメイク家具を製作している(写真 27)。その後も、庭に面した座敷の改修、痛みの激しいロウジの原状回復を、年ごとに行ってきた。これらは、少しずつどのように活用できるか考えながらのことである。その活用例について、ここでは2つを紹介する。

まずは、ギャラリー兼ワークショップスペースとしての活用の実験である。筆者は、プロジェクト型授業の中で、学生と作品制作に取り組んでおり、「バイオミミクリ空間の試行」と謳う一連の作品がある。その作品展示を三田屋で企画し、2015年11月、筆者が指導する大学生と地域の高校生で、ワークショップ形式の設営を行った。展示のレイアウトは、実測調査を通じて住居部分の特徴と捉えた、常居・中常居・台所・奥座敷・庭への軸線を主題としている。常居の脇の座敷に約2000ピースの木片を組んだ茶室(写真 28)を、台所の一角に大学生と高校生のコラボレーションでデザインしたインスタレーション作品(写真 29)を、そして軸線の延長の庭に木質構造の立体作品(写真 30, 写真 31)を配した。店舗1階に実測調査の成果を展示するものの、オクである住居部分に足を踏み入れる人は多くない。図面ではなく体感してもらう仕掛けでもある。

もう一つの活用例に、宿泊がある。2017年の遠野オフキャンパスの活動では、常居と中常居に蚊帳を張って、建築の改修作業と実測調査に関わるメンバーらが、宿泊をした(写真 32, 写真 33)。調査に関わる当事者が生活行為を通じて空間を体感するとともに、その様子を写真で記録に残している。活用の可能性とともに図面では伝わりづらいスケール感を、地域に見せる機会になったと考えている。



写真 22, 写真 23, 写真 24, 写真 25. 住居部分の掃除と床張りの作業

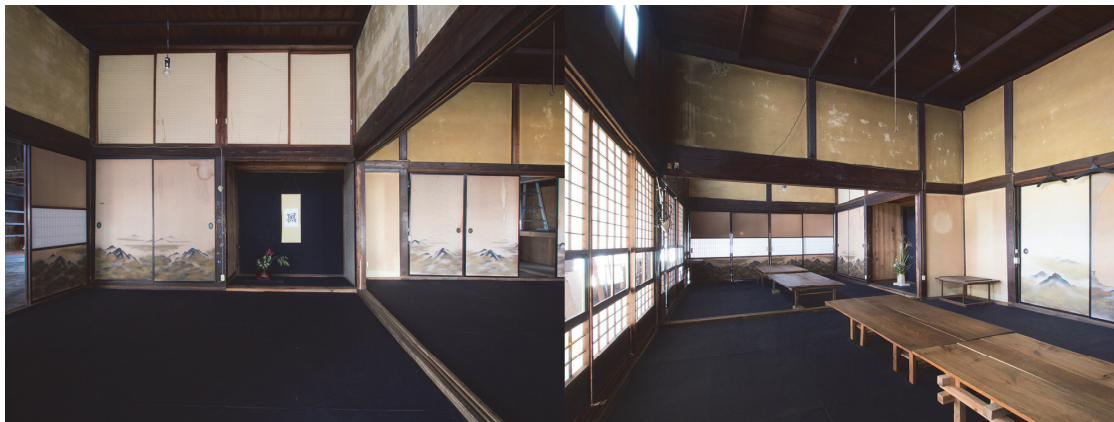


写真 26. 中常居(建築書道の掛け軸と生け花)

写真 27. 常居・中常居のリメイク家具

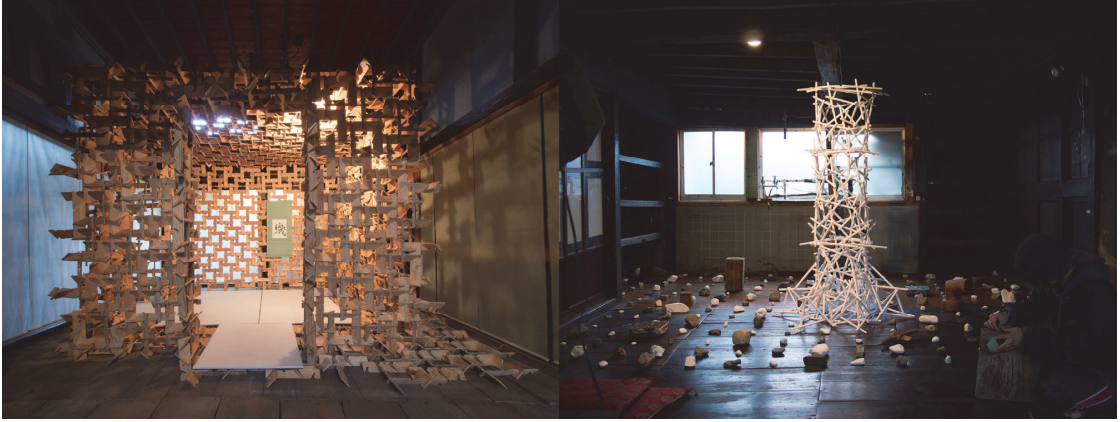


写真 28. 常居の脇の座敷に設営した木質構造の茶室

写真 29. 台所の一角のインスタレーション作品



写真 30. 常居から庭への軸線上の作品

写真 31. 作品と住居部分



写真 32. 蚊帳が張られた常居

写真 33. 中常居の宿泊利用

このような試みを重ねることは、地域の人にとって活用に向けた予行演習となる。同時に、本格的な改修を計画する側にとっての貴重な情報にもなる。毎年少しずつ、繰り返して実測することも、単に図面を残すこと以上の役割を担うと考えた。遠方から足を運び地域の人の協力を得て

調査を行い、レクチャーや展示を通じて成果を現地に残す中で、町なかのラボという三田屋の活用の可能性を示しているつもりである。

5 まとめ

三田屋での実測調査について、遠野オフキャンパスの活動を年度毎にまとめて発行しているフリーペーパー (HEii press vol.06, 2018, 発行: 遠野オフキャンパス) に、次のように書いた。

“この実測調査には、3つの対象と3つの目的があります。3つの対象は、「空間」「構造」「痕跡」です。そして3つの目的は、「(三田屋という) 建築そのもの」「遠野の町家の魅力」「(これまでとこれからの) 三田屋の物語」を測ることです。”

この実測調査の目的を、本稿でまとめてきたことを振り返って言い換えると、「保存」と「活用」の双方を繋ぐことだといえよう。文化財保存に向けた活動でも、調査は重要なプロセスである。今回、保存と活用を橋渡しする調査と考えたときに、独自の役割が求められる。

近年、文化財活用に関する動きが注目されている。政府が謳う地方創生や環境先進国も、関係している。その一環に、「明日の日本を支える観光ビジョン」(2016.3月)がある。内閣総理大臣が議長を務めた「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」(第1回: 2015.11月)がとりまとめた構想である。この構想のもと、文化庁は文化財を地域・環境資源としての活用に向けた施策(「文化財活用・理解促進戦略プログラム2020」2016.4月)を策定した。保存に比重が置かれた文化財を、より積極的に地域・観光資源として活用しようという舵取りである。一方、三田屋は、文化財としてのスポットライトを必ずしも浴びていたわけではない。だからこそ、解体・建て替えの土俵に上がっていた。いわゆる文化財を、保存から活用へ転換させることとは異なる状況である。三田屋の地域資源としての価値をあきらかにしつつ、地域にとって利用の価値を確認できる状況づくりが同時に求められる。

そこで、この実測調査の特徴をまとめる。建築家・構造物家・文化財保存の専門家、高校生、大学生・大学院生らが協働して実測を行っている。調査の成果を、逐次、現地でレクチャーや展示を通じて重ねている。そして、商店会・自治会のサポートを受けながら、繰り返し調査を実践している。つまり実測調査を通じて、レクチャー、展示、高校生の地域理解・キャリア教育、各種専門家にとっての研究、宿泊など、調査対象施設である三田屋の活用のシミュレーションをしているのである。保存と活用のための調査手法の実験でもある。

謝辞

本学は、「世界の幸せをカタチにする。」というブランドメッセージを掲げている。この言葉を、筆者は「地域のこれからのを、我がコトとして考える」と置き換えて活動している。本研究に、2016年度本学学院特別研究費の予算をいただいた。活動の趣旨に理解をいただいたと考えたい。市街地から集落へとフィールドを広げて調査をする中で、2018年度に同研究費の補助を得たことにも背中を押していただいている。本研究に関わりの深い遠野オフキャンパスの活動は、本文記載の諸氏のほか、森純平氏・林崎俊勝氏・徳吉英一郎氏・黒田篤史氏そして故堀切長太郎氏らとの協働によるものである。一日市町の商店会、遠野高校、遠野市役所の関係者ほか、地域の方々に協力いただいた。そして、調査に参加した本学学生と他大学学生らの労力に支えられた。そのすべての方々に、深謝する。